慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Sir Launfalの成立 : 比較的文学的考察
Sub Title	Genesis of Sir Launfal
Author	厨川, 文夫(Kuriyagawa, Fumio)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1963
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.14/15, (1963. 1) ,p.332(15)- 343(4)
Abstract	
Notes	西脇順三郎先生記念論文集
Genre	Journal Article
URL	http://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00140001-0343

Sir Launfal の成立

——比較的文学的考察——

厨　川　文　夫

I

十二世紀の女流詩人 Marie de France が作った 'lais' のうちの傑作であり，Marie の芸術の特色が最もよくあらわれた作品のひとつとされるもの（E. Hœpffner[1]）は，*Lanval* である。Marie の 'lais' の中で特に人気のあったものであるらしく，フランス語の写本も一番多く残っている。フランス語の写本以外にも，Marie の 'lais' を1230年ごろスカンジナヴィア語に訳した *Strengleikar* の中に，*Ianuals lioð* として入れられて居り，[2] 1310年ごろ Egenolf von Staufenberg が作ったドイツの騎士のロマンス *Peter von Staufenberg* のなか（ll. 327-617）にも，Marie の *Lanval* の一部（ll. 110-218）が使われている。[3] イギリスにも中世に *Lanval* を source とした作品がある。*Sir Landevale* と *Sir Launfal* の二篇がそれである。

Sir Landevale は，フランス語の八音節詩句の *Lanval* を，ME の short couplets にパラフレイズしたもの。現存の最も古い写本（オクスフォードの Bodleian Library 所蔵 MS. Rawlinson C 86）でも，15世紀後半のものにすぎないが，原本は *Sir Launfal* の

---

1 Ernest Hœpffner, *Les Lais de Marie de France* (Paris, 1953), p. 67.

2 R. Keyser og C. R. Unger (udgivet af), *Strengleikar eða Lioðabok* (Christiania, 1850), pp. 69-74. 現存の写本（ウプサラ大学図書館所蔵，DG 4-7）では *Lanval* の ll. 1-156 に対応する部分の訳が欠けている。

3 C. W. Prettyman, 'Peter von Staufenberg and Marie de France', *MLN*, XXI (1906), pp. 205-208. テクストは，Lutz Röhlich, *Erzählungen des späteren Mittelalters und ihr Weitleben in Literatvr und Volksdichtung bis zur Gegenwart*, I (Bern und München, 1962), pp. 27-42. 解説は特に pp. 245-46.

制作年代よりも古く，おそらく14世紀に溯るものと思われる。作者はわからない。

Sir Launfal は，この *Sir Landevale* を source とし，新たに挿話や場面や短い詩句を附け加え，12行の tail-rhyme stanza の詩形を用いて作ったロマンスである。*Sir Launfal* の現存する唯一の写本は，大英博物館所蔵の MS. Cotton Caligula A. II, fol. 35ᵛ—fol. 42ᵛ であり，15世紀前半に写されたものとされる。*Sir Launfal* の制作年代はこの写本の年代よりも古く，14世紀後半に溯る。*Sir Launfal* の方は作者の名がわかっている。「Thomas Chestre がこの物語を作った」(Thomas Chestre made þys tale) とこの作品の結びの部分 (l. 1039) で言っているからである。

Marie de France の *Lanval* (M), *Sir Landevale* (R), *Sir Launfal* (C) の三篇の関係が上述の如きものであることは，すでに1889年に，G. L. Kittredge が *Sir Landevale* の最良の写本 (MS. Rawlinson C 86) をはじめて校訂し，解説をつけて *American Journal of Philology*, Vol. X (1889), pp. 1-33 に発表した中で暗示したところである。[4] その後，Max Kaluza (*Englische Studien*, 18. Bd. [1893], pp. 165-190) は，M が R の source であり，R が C の source であるという関係を認め，この承認の上に立って，*Sir Launfal* と同じ写本に含まれた *Libeaus Desconus* と *Octovian* の二篇の tail-rhyme stanza のロマンスも，*Sir Launfal* と同一人の作，つまり Thomas Chestre の作であると断定した。最近では A. J. Bliss が *Sir Launfal* を写本から新たに校訂し，Introduction, Notes, Glossary をつけ，さらに Marie の *Lanval* と ME の *Sir Landevale* とを，それぞれ最良と認められる写本 (MS. Harl. 978; MS. Rawl. C 86) に拠って校訂して Appendix とした優れた研究を出している。[5] Bliss も M, R, C の関係については Kittredge や Kaluza と同じ見解をとっている。[6]

M, R, C を比較して，Thomas Chestre がどのようにして彼の作品 *Sir Launfal* を作ったかということを考えてみる。比較に使用するラクストは次のものである。

(1) *Sir Launfal.*—前掲 Bliss の刊本を使用する。必要の場合には British Museum MS. Cotton Caligula A. II のマイクロフィルムを参照する。

(2) *Sir Landevale.*—前掲 Bliss の刊本を使用する。Kittredge のテクストは，

---

4 Kittredge は，R を C の source とはせず，R, C の原本 x を仮設し (*op. cit.*, p. 17)，この x を C の source としている。しかし x は R と殆ど違わなかったと言っている (*op. cit.*, p. 21)。

5 A. J. Bliss (ed.), *Sir Launfal*, London and Edinburgh, 1960.

6 Bliss の見解は，すでに1958年の論文 'The Hero's Name in Middle English Version of Lanval' (*Medium Ævum*, XXVII [1958], pp. 80-85) の中 (p. 80) でも表明されている。

Kittredge 自身が写本を見たのではなく，Bodleian Library の George Parker が1888年に写本を転写したものに拠って校訂したものであり，多少誤がある。

（3） *Lanval.* 一次の四種の写本が現存する。——**H**=British Museum 所蔵 MS Harl. 978, fol. 154^{v}—fol. 159^{r}（13世紀中葉のアングロ・ノルマンの写本）。**C**=British Museum 所蔵 MS Cotton Vespasian B XIV, fol. 1^{r}—8^{v}（13世紀末のアングロ・ノルマンの写本）。**P**= パリ Bibliothèqne Nationale 所蔵 MS fr. 2168, fol. 54^{r}—fol. 59^{v}（13世紀後半ピカールの写本）。**S**=Bibliothèque Nationale 所蔵 MS nouv. acq. fr. 1104, fol. 6^{v}—10^{r}（13世紀末のフランシアンの写本）。これら4種の写本については，Jean Rychner の édition diplomatique を用いる。[7] 必要な場合には，British Museum と Bibliotlèque Nationale とによって筆者のために作られたマイクロフィルムを参照する。

II

（1） Thomas Chestre の主要な source は，前述のごとく *Sir Landevale* であるが，そのほかに作者不詳の 'lai breton' である *Graelent* [8] を用いたことが Kittredge (1889) 以来わかっている。*Graelent* と *Lanval* とは共通のケルト民間伝承によったらしく，話が酷似している。Chestre は *Graelent* から得た挿話や場面を *Sir Launfal* に取り入れた（本稿第V章参照）。*Lanval* の4種の写本のうち，PとSとには *Graelent* が収録されている。[9] Chestre がこのような写本によったということはありえぬことではない。

（2） Chestre は ME の *Sir Landevale* と共にフランス語の *Lanval* も使ったはずである。そんな確証は存在しないと A. J. Bliss は言っているが，[10] 私は Bliss があげていない根拠によって，Chestre がフランス語の *Lanval* の写本を参照したと考えるものである。——*Launfal* の中で，主人公に有罪の判決が下されようとした時，「十人の美しい女」（*ten* maydenes, bryȝt of ble; l. 850）が馬に乗ってアーサー王の宮廷へやってくる。そのあとから，前の十人よりも美しい十人の別な乙女が来る（oþer *ten* maydenes/Fayryr þan þe oþer *ten* of syȝt; ll. 883-84）。乙女の数は，いずれも10人である。ところが Chestre の source である *Landevale*, 351 では「二人の乙女」（*Two* maydyns）

---

7 J. Rychner, *Marie de France: Le lai de Lanval*, Genève et Paris, 1958.

8 E. Margaret Grimes (ed.), *The Lays of Desiré, Graelent and Melion*: Edition of the Texts with an Introduction (New York, 1928), pp. 76-101.

9 MS P, fol. 65^{r}-fol. 70^{r}; MS S, fol. 71^{r}-77^{r} Grimes が底本としたものは後者である（*op. cit.*, p. 54）。

10 A. J. Bliss, *op. cit.*, p. 27.

となっている。二度目に来た乙女の数は，*Landevale*, 385 には書いていないが，*Landevale*, 465 で乙女の総数を「四人」(iiij maidens) としているから，二度目にきたのは二人であったことになる。フランス語の *Lanval*, 472 でも「二人の乙女」(Deus puceles; 写本 P, H, S, C) であり，二度目 (*Lanval*, 510) も「二人」である (写本 P, H, C は Deus puceles. 写本 S は .ii. puceles)。なぜ *Launfal* の場合だけ，「二人」が「十人」に変っているのか。*Graelent* にも同じ場面があるが，乙女の数はやはり「二人」づつである (*Graelent*, 583, 607)。従ってこの場合は Chestre が *Graelent* によったということも，「十人」の説明にはならない。私はこの謎の鍵が，フランス語の写本の綴字法にあると考える。十四世紀以前のフランスの写本では，語末の us は x と書かれることがあった。「二」(deus) は dex と書かれる。たとえば，*Lanval* (写本 P), 521 では，「二人の乙女」(*dex* damoiseles) と書かれている。この deus (「二」) を表わす dex が，「十」を表わす dix ないし dis と読み違えられたのであろう。[11] Chestre が，「二人」を「十人」としてしまった理由は，Chestre がフランス語の写本を読みちがえたのか，又は dex が dix ないし dis となった写本を使ったからであろう。いずれにしても，Chestre は，*Lanval* をフランス語の写本で読んだことになる。

(3) *Sir Launfal* には，*Lanval* の四種の写本のうち，フランシアン方言の写本 S のみと共通な箇所がある。——*Sir Launfal*, 27-28 は，*Sir Landevale*, 20-22 によって書かれたものであるが，*Sir Launfal*, 29 は *Sir Landevale* には対応する詩句がなく，*Lanval* の写本 S (212^a-212^b) だけに殆ど同じ意味の句が見える。——

Sir Launfal, 27-29 : —

Launfal, forsoþ, he hyȝt.
He gaf gyftys largelyche
Gold and syluer & clodes ryche.

Sir Landevale, 20-22 :—

Sir Landevale, forsoith, he hight,
Sir Landevale spent blythely,
And yaf yeftys largely.

Lanval (写本 S), 212^a-212^b :

[11] 十四世紀になると語末の x は s の音を表わすものと見られるようになったからである。cf. G. Paris et E. Langlois, *Chrestomathie du moyen âge*, Paris [s. d.], p. XXXVI.

Lanual despendoit largement

Lanual donnoit or et argent.

語句の近似したものを並べてみると次のようになる。——

Launfal	27	28	29
Landevale	20	22	
Lanval（写本S）		212^a	212^b

Launfal の作者は，*Landevale* の主語の反復（20-21）を見て，*Lanval* の主語の反復されている一節を想起し，*Lanval* 212^b によって *Launfal* 29 を書いたものではないか，と想像できる。ところが *Lanval* のこの2行（212^a, 212^b）は，写本Sのみに存在し，他の3種の写本（H, C, P）には存在しないのである。

（4） しかし，このことから *Launfal* は *Lanval* の写本Sによったものだ，と速断することはできない。別に *Lanval* の写本 H だけが *Launfal* と一致する場合もあるからである。——*Launfal* では，主人公の裁判について提案をする人物は，「コーンウォルの伯爵」(þe Erl of Cornewayle; 838) となっている。*Sir Landevale* でも同様 (the Erle of Cornwayll; 335)。ところが *Lanval* の4種の写本を見ると，写本 H だけが「コーンウォルの伯爵」(li quoens de cornwaille : 写本 H 433) で，他の写本では，いずれも「コーンウォルの公爵」(li dux de cornoualla : 写本 P/li dus de cornoaille : 写本 S/li dux de cornewaille: 写本 C) となっている。

（5） また作品の題と主人公の名については，*Lanval* の4種の写本のうちCだけが，アングロ・ノルマン方言の音韻変化 an >aun を示していて，ME *Launfal* と一致する。

従って，Chestre がフランス語の *Lanval* の写本を参照したとしても，それは現存の写本 H, C, P, S のいずれとも多少異った写本であったことになる。

Ⅲ

物語の筋に関するかぎりでは，*Landevale* は，Marie の *Lanval* とほとんど違わない。Chestre は *Landevale* の物語をほとんどそっくり取り入れ，その上に *Graelent* から取ったり自分で創作したりした挿語や場面を附け足している。したがって物語の筋に関するかぎりでは，Marie の *Lanval* と Chestre の *Launfal* との相違は，Chestre が附加した部分によって生じたことになる。Chestre が *Landevale-Lanval* から削除した

部分は六ケ所あるが，それらのうち一ケ所以外は物語の筋には影響がない。[12] Chestre が附加した部分にも，アーサー王の宮廷の騎士のリスト（*Launfal*, 13-24）や Tryamour の馬の鞍の描写（*ibid.* 949-960）のように物語の筋に関係のないものがある。筋に関係し，物語の構成を新しいものとし，物語の意味を変えてしまったものは，Chertre が附加したいくつかの挿話，および挿話とは言えないような小さな場面である。これらの附加を考察する前に，Marie の *Lanval* の物語の構成を見て物語の意味を考えておく必要がある。

Ⅳ

Marie の *Lanval* の物語の構成は単純である。Lanval はアーサー王の宮廷に仕える騎士であった。王は他の諸公たちに物を与える時でも，Lanval だけには何ひとつ与えない。（その理由を Marie は説明していない。）気位の高い Lanval は，王に要求することもなく，自分の財を費いはたして困窮し，悩んでいた（1-38）。——ある日，Lanval は気晴らしのために馬に乗り，町の外へ出た。川のほとりで馬をおり，牧草地に身を横たえて川を眺めていると，二人の美しい女が近づいた。ひとりは一対の金の水盤を持ち，もう一人はタオルを持っている。Lanval に挨拶をして，美しい自分の女主人が Lanval に会いたがっているから，自分たちについて一緒においで下さいという。Lanval がついて行くと，立派な天蓋が張られ，その中に美しい女が休んでいる。女は Lanval に愛を語り，Lanval も女に奉仕を申出て，こうして Lanval はこの絶世の美女（妖精なのである）から，愛のみならず無限の富までも与えられる。ただひとつ条件がある。Lanval は，いかなることがあろうとも自分の恋人のことを他人に知らせてはならぬ。もしこの誓いを破れば，Lanval は女に会うことが出来なくなる，というのである。Lanval は恋の秘密を守ることを固く誓う。女は Lanval に接吻し，抱擁して夕刻に至った。これからのち，Lanval は何時でも望む時に女に会えるし，女のくれた魔法の財布から金が無限に得られることになる。Lanval は気前よく人々をもてなしたり，物を施したりする（39-218）。——この幸福な Lanval に危機がおとずれる。嬌慢な王妃が Lanval に求愛したのである。Lanval は，アーサー王を裏切りたくない，という口実の下に，王妃の

[12] *Land.* 26-30（*Lanv.* 35-38 に対応）; *Land.* 43-54（*Lanv.* 51-54 に対応）; *Land.* 317-326（*Lanv.* に対応するものなし）。——これら三ケ所は，いずれも Landevale のなげきの言葉である。*Land.* 129-138; 153-156（いづれも妖精の言葉）。物語の筋と意味とに影響するのは，*Land.* 503-530 の省略だけである。この省略については，後段（12頁脚註20）参照。

求愛を拒絶する。激怒した王妃は，Lanval に恋人ができないのは，同性愛の罪を犯しているからだろう，と言い，罵る。たまりかねた Lanval は思わず，自分には美しい恋がいると言い，さらに自分の恋人の侍女のうち一番美しくない女でも，王妃よりも美しいと言い放つ。こうして Lanval は恋の秘密を守る誓いを破ってしまった。王妃は怒り狂って，アーサー王に，Lanval が自分に言い寄り，自分が拒むと，こんどは逆に自分を侮辱して Lanval の恋人の侍女より醜いと言ったと，誣告する。王は憤激して Lanval を召喚せよと命じる。Lanval は絶望している。妖精の恋人にいくら呼びかけても，姿も見せず，言葉もかけてくれないからである。(219-351)。——（ここから Lanval の裁判の場面になる。Marie de France は，ここで十二世紀後半の現実の裁判の手続や活廷の用語を，物語の中に取り入れている。[13]）原告たるアーサー王が告発する。被告 Lanval は，自分が王を辱しめるような行為をしたということは否認したが，自分の恋人の美貌について言ったことは真実であるという。コーンウォルの伯爵（写本H, 433）の提案によって，もし Lanval が自分の恋人を宮廷へ出頭せしめて，Lanval が言った通りの美貌の持主であることが証明されるならば，Lanval はゆるされるが，然らざる場合には，王の臣下の権利を剝がれて追放されることとなる（352-460)。——恋の秘密ということは宮廷恋愛（amour courtois）の最も重大なおきてであった。Lanval はそのおきてを破った。しかし Lanval は恋人を深く愛するが故に王妃の求愛を拒み，王妃が怒って Lanval をののしったので，自分の恋人の美貌を誇ったのである。いわば恋のために恋のおきてを破ったのである。Lanval の恋人は，妖精であるが，貴族の女性の理想化でもある。Lanval の恋人は，Lanval をゆるすであろうか。この恋愛心理に対する興味が，作者 Marie にも，読者ないし聴衆たる宮廷人にもあったと思われる。妖精の美女が Lanval をゆるさなければ，Lanval の身は危い。もし美女が Lanval をゆるすならば，法廷へ証人として出頭するはずである。Marie de France の読者ないし聴衆は，おそらく Lanval の境遇に同情を寄せ，Lanval の恋人の女性の内面の葛藤を想像して，事の成り行きに強く心を惹かれたことであろう。時と共に Lanval の身には危機が迫る。王も王妃も激恐しているではないか。この時，Lanval の恋人は，法廷に圧倒的な美に輝く姿を現わすのである。この圧倒的な美貌の印象は，三重の漸層法で最高度まで強められる。[14] す

[13] Jean Rychner, "Explication du jugement de Lanval" (*Marie de France: Lais de Lanval* [Genève, 1958], pp. 78-84).

[14] この三重の漸層法は，Marie de France が Thomas の *Tristan* (éd. B. H. Wind [Leiden, 1950], p. 109; ll. 45-68) に学んだものであろう。この点はすでに Hœpffner (*op. cit.* [1935], pp. 65-66) が指摘している。

なわち，まず二人の美女が法廷へやってきて，自分たちの女主人の来訪を予告する。Lanval の味方である Walwein (=Gawain) その他の騎士たちは，この二人の美女のいずれか一人が Lanval の恋人にちがいないと思って Lanval にきく。Lanval は知らぬ女だという。そして裁判が続行される。Lanval の危険は去っていない。その時，前の二人よりもさらに美しい二人の女がくる。Walwain たちは，今度こそ Lanval の恋人がきた。Lanval は助かると思う。ところが，Lanval は，これも知らぬ女だ，という。女たちは，アーサー王に女主人の来訪を予告し，アーサー王に彼女を迎える準備をたのむ。アーサー王は承諾し，再び裁判へもどる。判決がおくれたので，王妃の怒りはいよいよ激しく，法廷は遂に Lanval に有罪の判決を下そうとする。この時，町が騒がしくなり，絶世の美女が白馬にまたがり登場となる。作者は，この美女をくわしく描写する (ll.547-574) のみならず，その美しさが万人に与える心理効果を描いている (ll. 575-584)。Lanval は，これこそ自分の恋人だという。アーサー王をはじめ宮廷の騎士たちは，Lanval の言葉がいつわりでなかったことを思い知ったのである。美女は，自分が Lanval の恋人であること，王妃の言葉は事実と違い，Lanval が王妃に求愛したことはなかったのだということを王に告げる。Lanval の無実が妖精によって証明されたので，Lanval は裁判の上では無罪となった。しかし Lanval が恋の誓いを破ったことは，ゆるされるであろうか。美女は Lanval に向っては，一言も言葉をかけていない。ゆるすともゆるさぬとも言っていないのである。アーサー王をはじめ，宮廷の人々が引き留めるのを断って，馬に乗り，去ろうとする。妖精の美女が今 Avalun へ去ってしまえば，Lanval は永久に恋人を失うであろう。城の広間の外に，体の重い人が馬に乗るとき踏台に使う灰色の大理石があった。Lanval はこの石の上に乗り，美女が馬に乗って出てくると，やにわにその馬に跳び乗った。こうして二人は Avalun へ去った。(ll. 585-644)。——Lanval が積極的な非常手段に訴えて，恋人の乗った馬に跳び乗ったとき，Lanval の強い愛によって，誓いを破った罪は宥されたのであった。この *Lanval* の結末は，作者の結論を示しているものと思われる。

Lanval は宮廷人の文学である。中世の宮廷文学が好んで扱った恋愛論と恋愛心理がこの物語の動因として作用している。主役は，いうまでもなく Lanval と妖精の美女である。この美女は妖精ではあるが，貴族女性の心の持主である。王妃は，この二人の恋愛関係に危機を発生せしめ，宮廷恋愛論の難問題を作るだけの役割を演じた後は，舞台の奥に退く。わき役にすぎない。ところが ME の *Sir Launfal* に至ると，次に見るごとく，

物語は変貌し，王妃は主役の一人となる。そして物語の意味も変ってしまうのである。

V

Thomas Chestre は，Marie de France の *Lanval* を参照したと思われるふしがある（本稿第Ⅱ章）。しかし主な source としては，*Lanval* の ME 訳 *Sir Landevaale* を用いたのであるから，Chestre が物語に附加した要素を明かにするためには，*Sir Launfal* (C) を Marie の *Lanval* (M) と較べただけでは不充分である。*Sir Landevle* (R)と比較せねばならない。R, M に対応するものが存在しないCの詩句は，Chestre が附加したものである。

（1） C3-5（'ley' の標題。Rになく，M2-4 にある。）

（2） C13-24（アーサー王宮廷の騎士のリスト。R, M になし。）

（3） C37-72（アーサー王の求婚と結婚。Launfal は王妃の淫奔を嫌い，王妃も L. を憎んで，宴の席で他の騎士たちには贈物をするが，L. には何も与えない。R, M になし。）

（4） C73-180（Syr Huwe と Syr Ion の話。R, M になし。）

（5） C181-210（市長の娘の話。R, M になし。*Graelent*, 176-194[15] に拠ったらしい。）

（6） C214-216（Launfal の馬が滑って，L. は泥の中へ落ち，人々が嘲笑する。R, M になし。*Graelent*, 201-202[16] に拠ったもの。）

（7） C318-339（妖精の美女の贈物。R129-134；M135-139 では，その贈物が何々であると列挙することがない。Chestre はおそらく，*Graelant*, 310-320, 347-383[17] に拠ったもの。）

（8） C339-340；344-345（食卓と酒のこと，R, M になし。）

（9） C373-399（Launfal の所へ，Gyfre が Blaunchard という白馬に乗って，妖精の美女 Tryamour からの贈物を届ける。R, M になし。*Graelent*, 347-383[18] に拠ったらしい。）

(10) C400-415（市長は Launfal が金持になり出世したと思って，食卓にまねく。L. はことわる。M, R になし。）

---

[15] E. M. Grimes (ed.), *The Lays of Desiré, Graelent and Melion* (New York, 1928), p. 82.

[16] Ed. Grimes, pp. 82-3.

[17] Ed. Grimes, pp. 86-9.

[18] Ed. Grimes, pp. 87-9.

(11) C 416-420 (Launfal は立派な服を着る。L. の借金は，Gyfre が割符[借用証]によって返済する。R, M になし。)

(12) C 433-636 (Karlyoun の馬上試合，Syr Valentyne との試合。Launfal は妖精から与えられた従者 Gyfre の超人的な助力で勝利を得る。L. は武勇の名声によってアーサー王の宮廷へ呼びもどされる。R, M になし。)

(13) C 667-672 (さまざまな音楽師の演奏のこと。R, M になし。)

(14) C 705-708 (王妃が L. に復讐の念を燃やす。R, M になし。)

(15) C 733-744 (L. の魔法の財布も，従者 Gyfre も，乗馬 Blaunchard もなくなり，甲冑は汚れてしまう。R, M になし。)

(16) C 808-810 (L. の恋人がもし王妃よりも美しければ，自分の眼を刳り抜いてもいい，と王妃は言う。R, M になし。)

(17) C 949-960 (Tryamour の乗馬の鞍の描写。R, M になし。)

(18) C 1006-1008 (Tryamour は，王妃に息を吹きかけて王妃を生涯盲人とする。R, M になし。)

(19) C 1012-1020 (Gyfre が L. の馬を連れて戻る。L. は馬に乗り，恋人やその侍女たちと共に去る。R, M になし。)

(20) C 1024-1034 (毎年ある日になると，L. の馬のいななきが聞える。R, M になし。*Graelent*, 746-750 [19] に拠ったらしい。)

(21) C 1039-1044 (結び。作者が自分の名を Thomas Chestre と名乗り，イエズスとマリアとに祈りを捧げる。R, M になし。)

(22) 妖精の美女の名 Tryamour，妖精が L. に与えた従者の名 Gyfre，乗馬の名 Blaunchard は R, M になし。

(23) 主人公の名は，Launfal (C), Lanval (M), Landevale (R). (C, R, M の内部にも異形がある。) 恋人らの去った妖精の国の名は，Olyroun (C), Amylyon (R), Avalun (M の写本 H, C；写本 P aualon；写本 S analon).

---

[19] 主人公が最後に妖精からうける試練の場面 (M 633-640) は，*Landevale* (R 503-530) では*Graelent* (677-740) に拠つたらしく，異つている。しかし試練の場面はRにもあるのである。ところが Chestre は，この場面は全部省いている。この省略は，物語の意味に関係し，重要である。これについては後段 (332頁を参照)。

VI

Sir Launfal の聴衆は，*Lanval* の聴衆のような宮廷人ではない。十四世紀の農民一揆時代のイギリスの町人や農民であった。Chestre は彼らの嗜好にあわせて *Sir Launfal* を作ったのである。Chestre が *Lanval* の物語に加えた変化はこのことを示している。

主人公 Launfal は，Lanval と同じく騎士であるが，庶民の共感を喚ぶように，Chestre は仕組んでいる。Launfal は王妃の淫奔を嫌って王妃から憎しみを受け，アーサー王の宮廷を離れて浪人となり，昔家臣だった Karlyoun の市長から冷遇され，持ち金を使い果して貧乏と借財に苦しみ，町の人々からも軽蔑される，忠実な従者 Syr Huwe と Syr Jon も，Launfal の下では生活できなくなって，アーサーの宮廷へ帰ってしまう。Launfal は孤独で，貧しく，名もなくて，人々から軽蔑されている。作者は特に Launfal の貧乏と世人の軽蔑とを強調する。つまり Chestre によれば，Launfal は，王妃の憎しみのために浪人となり悲惨な境遇に落ちたのである。Lanval の苦しみは，庶民の共感しうる苦しみであった。

Chestre 妖精は，この Launfal を，孤独と貧困と世人の軽蔑とから，一挙に救い出す者として登場する。すなわちこの妖精の出現によって，Launfalは絶世の美女を恋人とし，無限の財宝を持ち，武勇の誉を獲得することになるのである。恋人と財宝とは Marie の *Lanval* にもあった。しかし武勇の誉れは Chestre が附加したものである。——妖精は Launfal に神通力を持った従者 Gyfre と駿馬 Blaunchard とを与え，その上 Launfal に不死身を与えることを約束する (C 325-336)。そのおかげで Launfal は，Karlyoun の馬上試合に全勝し，また巨人 Syr Valentyne を斃す。Launfal の武名はアーサー王に聞え，王の式部宮として宮廷へ招き戻されるのである。

——物語はここから *Lanval* や *Landevale* の筋道へもどる。しかし *Launfal* では *Lanval* とは，物語の強調点がちがう。嬌慢な王妃が Launfal に求愛し，Launfal がこれを拒絶し，それと共に妖精への誓を破る過誤を犯して危機に陥る。妖精は姿を消して現われない。それは *Lanval* でも同様だが，Chestre はここに *Lanval* になかったことを附け加えている。——魔法の財布が消え失せ，神通力をもった従者 Gyfre は駿馬 Blaunchard に乗って去り，「花のように白かった甲冑は黒色に変ってしまった」(C 733-744)。Launfal は美しい恋人を失ったばかりでなく，無限の財宝と武勇の誉とを獲得する手段をも失ってしまったことを Chestre は強調したのである。

Lanval はまたしても王妃のために悲惨な境遇に陥った。嬌慢な王妃は，自分より美しい女を Launfal が証人に連れてくることができれば，自分の眼を刳り抜かれてもいいという (C 808-810)。これは妖精に対する王妃の挑戦として，Chestre が挿入したのであろう。最後に妖精がアーサー王の宮廷へ姿を現わして Launfal を救うところは，*Lanval* と同様だが，Chestre の妖精はさらに進んで，王妃に毒気を吹きつけて，美貌を誇った王妃を終生の盲人としてしまう (C 1006-1008)。Chestre の場合には，宮廷恋愛の掟を Launfal が破ったことは問題でなく，妖精が Launfal を罰したのは，秘密の誓を破ったことに対してであり，その原因は王妃にあるので，妖精は Launfal を，Marie の妖精のように，最後まで試練にかけることはしない。[20] 簡単に宥してしまう (C 1012-1020)。その代り王妃には痛烈な復讐をするのである。

Sir Launfal に於いては，王妃が妖精に対抗する役割を与えられていることは，明かであろう。この両者が主人公の運命の転変をひき起し，最後には妖精の徹底的な勝利となるという仕組である。

主人公 Launfal は騎士ではあるが，十四世紀のイギリスの庶民が共感し，同情しうる人物として描かれている。騎士の美徳としては，「気前のよさ」(largesse) だけが強調されているにすぎない。Launfal は馬上試合で全勝する。しかしそれは Launfal 自身の武勇によるものではなく，妖精の助力の賜である。騎士の礼節にも欠けるところがある（たとえば Launfal が王妃に対する雑言のごとき。C 694-699)。要するに Launfal は宮廷人の考えた騎士の理想から程遠いものである。

Marie de France の *Lanval* は，宮廷人の恋の掟と愛の問題を扱った優婉華麗な物語であった。単純で無駄のない構成と，きわめて洗錬されたスタイルをもつ心理劇であった。Thomas Chestre は，この物語に手を加えて，農民一揆（1381年）時代のイギリス庶民の嗜好と願望とを表わしたロマンスと化したのであった。神秘は失われて現実的となり，精神的な問題は消えて，物質的な問題が興味の対象となった。

---

[20] A. J. Bliss は，この試練の場面（R 503-530；M 633-640）を，Chestre が省略した意味を理解せず，誤った解釈を施している (Bliss, *Sir Launfal*, p. 29)。M には R に対応するものがないと Bliss は言うが，試練の意味は，R 503-530, M 633-640 のいずれにも存在するのである。本稿336頁，および334頁脚註19を参照。